

相撲の歴史の研究

A study of Sumo History

1K04A256-1

梁 孟聖

指導教員

主査 加藤清忠先生

副査 小野沢弘史先生

はじめに

私は、小学校4年生のときに相撲を始め、中学・高校そして、大学へと13年間の部活動が続けてきた。

このように現在まで自分の人生の半分以上続けてきた相撲を行なうだけではなく、相撲のことすなわち歴史について考え、学ぼうと思い、今回卒業論文という機会に研究をすることに決めた。

まずはじめに、様々な相撲についての文献を調べた。世界には、日本の相撲とは大きな違いがあるが、数多くの広い意味では相撲といえる競技が存在する。

そこで私は、今回の卒業論文では世界で行なわれる様々な相撲に注目してみた。日本の相撲と世界で行なわれている相撲を比較することで、文化の違いや競技方法の違いを調べてみることにした。そのためには、とにかく相撲とは何か？相撲の起源や世界に存在する相撲について知る必要があった。

第一章～第五章

世界中には多数の相撲に似た競技が存在する。世界中の相撲を調べていると、たとえば第一章の相撲のはじまりで、現在ではもちろん女性が昔から土俵や相撲を行なう場所で、相撲することを禁止している。一部では、例外に女性も行なう地域もあるが、相撲とはかけ離れている。最近では、新相撲という新しい競技ができ女性も相撲を行なう場ができた。しかし、男性が相撲を行なう土俵ではなく、マットの上で行う。世界大会も行われるほど、競技としてはメジャーになってきている。それでも、両国国技館などで行われることはない。

なぜ相撲ができたのかというものをさかのぼると、単純に力比べであると私が調べた結果ではそう思う。人間の原点、力比べは後に、戦、戦争に変わっていくが、人間という生き物は他の人や物と比べて優越をつけてきた。その最初のはじまりが力比べであると思う。

それが、どんどん進化していき相撲になったり、格闘技になったりすべての原点は同じである。オリンピックにもある様々な競技でも同じことが言える。

さらにその競技が進んでくると、練習や考え方、精神論などが生まれてくる。日本の相撲では、四股(相撲の基本練習であり、足腰を鍛えるもの)やてっぽう(相撲場にあるてっぽう柱や人と人が互いに向き合い突っ張りをする事で腕力を鍛えるもの)やすり足(相撲を行なうのに大事な足をうまく運ぶための練習で、足を開き、膝を外に向け腰を落として行うもの)などがあるが、体を鍛えるという目的もあるが、同時に精神を集中させ自分の体勢また、相手をイメージして行う。これを行うことにより、対戦したとき思い通りの動きができたり、追い込まれても焦ったりしないで落ち着いて対処できるようになる。

日本の中にも本土と違う相撲がある。沖縄の角力といわれるものでスタイルからルールまで違う。相撲協会も別々に存在する。

イランの相撲はコシュティといわれ、ズール・ハーネという器具を使用したり、徒手体操を行う道場で行われるうちのひとつであるが、このコシュティで国同士の運命を左右するぐらいの重要なもので、当時の文化にも影響をあたえるものだった。

このように、相撲といっても様々な意味、文化が各地にあり、そこで生活している人たちの様子もわかり、とても奥が深いものである。

終わりに

今回の卒業論文にあたり、世界中の相撲を全部調べたわけではないので、まだまだ書ききれてない部分や知らないことがあると思う。

現在で有名な相撲で、韓国の相撲シルムやモンゴル相撲も調べればよかったと思うが、他の国の相撲のほうが歴史が深く、様々な文化があったのであえてはしなかった。また機会があれば興味があるので調べたいと思う。

最後に、この卒業論文を終えて、色々な国に相撲があり、様々な文化があることが分かった。国や文化が違っても最終的には、同じであり、体を鍛えたり、精神面で強くなることで人が生活をより良いものにしていくという努力であるように思う。